

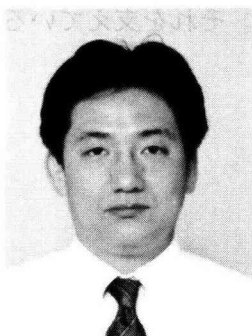
## 巻頭言

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学情報基盤本部 公開日: 2011-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川島, 高峰 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/9292">http://hdl.handle.net/10291/9292</a>

## 巻頭言

## 『Informatics』刊行、第4号を迎えて

情報基盤本部副本部長 川島 高峰



『Informatics』は今号で第4号の刊行を迎えることができました。多様な論稿を寄せて頂いた方々に深く感謝を申し上げます。本号に寄せられた諸論考の領域の広さは、基盤本部が提供しなければならない研究・教育の「情報化の現場」が実に多様であることを示しています。この情報化の現場により良い創意工夫と試行錯誤ができる環境を提供することに情報基盤本部の大切な役割があります。

このおよそ五年間、情報化には実に目まぐるしい変化がありました。グローバル化・動画化・モバイル化・地デジ化にそれを実感します。そして、今、再びデバインドが問題となってきました。グローバル化は従来から言われてきました。しかし、近年のそれは大衆化してきた点で異なる次元に入ったと認識します。動画の一般化には驚くべきものがあります。一時期、著作権上の問題が多く指摘された動画サイト・You Tubeも、昨今では諸政党や大新聞が公式サイトの中に取り込むようになってきました。モバイル化により何時でも、何処でも、誰でも、動画を始めとした情報を収集、編集、発信することが容易となりました。地デジ化は動画情報のデジタル化が大衆規模で進行する社会基盤を形成し、今後、大学の情報設備に多くの課題をもたらすことでしょう。この他方、金融恐慌は新たなデジタル・デバインドの拡大をもたらしています。この一年、情報インフラの確保が困難になった学生が増えたと感じています。グローバル化・動画化・モバイル化・地デジ化、これら四つの全てが格差の象徴になりかねない時代となりました。

このように「情報化の現場」の変化により基盤の概念も、不断の変化を余儀無くされます。しかし、限られた予算と人材の中でこれを実現することは容易ではありません。このために必要な基本方針を、村田潔本部長は、統合化・外部化・スリム化による「持たざる情報化」として、その理念を示されました。

「持たざる情報化」の実現には、学外が「持つ」情報資源と、学内を結ぶことが必要であり、このためには情報セキュリティの整備が必須となります。情報セキュリティは外に開かれた基盤のためのものであり、危機意識を強化し内向化するためのものではありません。基盤本部は、この理念の実現に向け努力を重ねてきました。

この一年間を振り返り、最も気がつかされた点は、情報の基盤と情報化の現場との関係性です。どこまでが「基盤」で、どこまでが「現場」か、その差異は定義しがたく、このような場合、関係性が良好であることが物事の進展の鍵になります。これがないと裁量・所轄・権限をめぐる上下関係だけが露出してしまいます。

思えば村田本部長は、就任早々、情報基盤の「姿勢」として「グリーンIT」を示されました。「グリーンIT」は、数値化した指標で見ると、必ずしも、簡単に達成できるものではありません。しかし、「数値化」に合理性がなければ「グリーンIT」の推進に意味はないと言えるでしょうか？ 地球温暖化への取り組みとして様々な試みがあります。中には科学的検証による合理性の確認に至っていないものもあります。二酸化炭素排出の問題でさえ科学的合理性の確認については論争があります。つまり、このような取組は、必ずしも数値の合理性だけに支えられているわけではありません。それを支えているのは「姿勢」の問題です。

この一年は、情報基盤の姿勢を考える一年にしたいと思います。